

<書評論文>

グローバル化の中のサッカー

Franklin Foer,
*How Soccer Explains the World:
 An Unlikely Theory of Globalization.*
 (HarperCollins, 2004)

岩 谷 雄 介

はじめに

本書の中で著者が述べているように、サッカーはいまや世界でもっとも普及したスポーツであり、また他のいかなる経済活動よりグローバル化されているようにすら見える。その点から経済や文化を研究する上で重要な研究対象となりつつあるが、現代サッカーの中心地であるヨーロッパや南米に比べてプロリーグの発足が遅れた日本では、国内のサッカーの発展や地域性に焦点をあてた論文や図書に比べて、グローバリゼーションと地域性との関連性を含むものはあまりない。本書は *The New Republic* の編集者の Franklin Foer が世界各地でのフィールドワークで得たインタビューによって、地域の文化や問題とグローバリゼーションの関連性を明らかにすることを試みたものである。

グローバリゼーションは、国民国家の枠組みを超えて政治的・文化的・経済的な次元で、世界でただ一つの地球規模のシステムへと移行する過程のことを指す幅広い意味を持つ概念であるが、本書の中では①サッカーという一つのスポーツがテレビやインターネットといったメディアを通して世界に伝播していくこと、②経済の次元において企業の多国籍化が進んでいくこと、③人の移動が国際化していくこと、の三点の限定的な意味で用いられている。本書ではグローバリゼーションがすでに存在していたローカルな問題にどう作用するかを中心に論じており、ギデンズが指摘しているようなグローバルなものとローカルなものとの対立という構図は八章、九章、十章で論じられている。

本稿では第一節で本書の概説をし、第二節ではグローバリゼーションとサッカーに関す

るローカルな対立について、第三節ではサッカーと多国籍経済の接近について、第四節ではグローバリゼーションと伝統について取り上げる。

1 本書の構成

本書の構成は、まず序章の中でサッカーの現状としてサッカー不毛の地といわれたアメリカにおいても現在では衛星放送やケーブルテレビによってヨーロッパサッカーやラテンアメリカのサッカーが観戦できること、またピッチ上では選手の多国籍化が著しいことが述べられる。その後の一章から十章は大きく三つに分けることができる。一章から四章ではグローバリゼーションとローカルな対立の関係がサッカーを通して描かれる。このパートでは主にフーリガンとよばれる過激なサッカーファンについて語られる。五章から七章まではサッカーとグローバル化された経済との接近について述べられる。八章から十章は、グローバル化するサッカーが昔ながらの伝統に果たしている影響について述べられている。

2 グローバリゼーションとサッカーに関するローカルな対立

グローバリゼーションがときにローカルな対立を増幅させる場合があるというのが著者の主張である。一章では、もともとはサッカーファンの集まりであり単なるフーリガンであった組織がユーゴスラビアの国家分裂の混乱のなかで民族浄化を実施する部隊として政治的・軍事的に機能したということが述べられる。二章ではスコットランドの例を挙げてより文化的、経済的な側面からローカルな対立とグローバリゼーションの関係が論じられている。造船などのグラスゴーの主な産業はカトリック信者の労働者を不当に扱っていたが、グローバル化が進み、グラスゴーの産業界にアメリカや日本の資本が参入することでそういった不公平が解消されるようになった。しかしそうなるから両チームから対立がなくなることはなく、むしろ激化していったのは、その対立自体を楽しむボルノグラフィ的快楽の対象になっているからであると著者は指摘する。グローバリゼーションによって民族的対立や宗教的対立がゆるやかになり、経済的格差が少なくなったグラスゴーでは、均質化するアイデンティティを区別する手段としてサッカーのクラブチームが選択され、対立の構造は維持される。また、純粋なスポーツ的な対立としてだけではなく、ファン同士の対立そのものも意識的に商品として提供され、経済的な効果を生んでいる。このように、セルティックとレンジャーズの対立は、グローバル化が希薄にした歴史的・民族

的なアイデンティティを再確認するためのボトムアップ式の対立と、経済的な側面からトップダウン式に提供される対立とが融合された、意識的で作為的な対立であることが指摘される。

一章と二章とは逆に、グローバリゼーションによってローカルな対立が緩和されたかに見える例を示しているのが三章である。著者は三章の中でユダヤ人を中心にヨーロッパで生きる周辺化された人々とサッカーの関係を描いている。グローバリゼーションが進行することによって人の移動が激しくなり、ヨーロッパ諸国はたくさんの移民を抱えることになった。自国内に住む異邦人はユダヤ人ではなくなったために、ユダヤ人に対する憎悪が異邦人全体に分散したことが述べられている。また四章では、クラブチーム自体がグローバル経済のシステムに組み込まれたことで、ローカルな対立が緩和した事象を述べている。イングランドで1989年に起きた、客席の収容人数以上に入ったファン95人が窒息状態になるという事件を受けて、時のサッチャー政府はサッカースタジアムの整備やビデオカメラの設置などを各クラブに要請した。これをきっかけにイングランドのクラブの経済原理は一気に変化する。多くのクラブは株式を公開することで巨額の資本を調達した。その資本でスタジアムを整備し、高収入者のための豪華な席を新設した。放映権をルパート・マードックの衛星放送局に売却し、莫大な利益をあげるようになり、快適になったスタジアムには女性や子供の姿が見られるようになる。警備員の増員と監視カメラの設置のためにフーリガンは騒ぎを起こせなくなり、チケット代は上昇したもののスタジアムは安全な雰囲気を獲得したと述べられている。

一章はフーリガンに対する、労働者階級で酔っぱらいというような典型的なイメージを否定する目的を持っているため特殊だが、二章から四章にかけてはグローバリゼーションによって地域あるいはクラブチーム自体が経済的に繁栄し、その結果もともと存在していたローカルな対立が緩和したり、あるいは消費の対象に転化したというケースを好意的に描いている。しかし本書のなかで著者も認めているように、グローバリゼーションはサッカーにおける黒人差別を一般的なものにした。現在のトップレベルのサッカー界において黒人選手は不可欠な要素であり、ほとんどのチームに少なくともひとり是在籍しているといえるぐらい一般的な存在である。エトオ、ドログバ、アデバヨールなどスター選手も多く存在する。それに比べればユダヤ人またはユダヤ系の選手が現代サッカーに与えている影響は大きくない。グローバリゼーションによってユダヤ人差別が緩和したことそれ自体は非常に評価できるだろうが、それと同時に起こっている問題を含めて現在のサッカー界を考えた場合、その変化全体を改善と言うことには強い抵抗を感じる。また、スタジアム環境の整備によって安全性が増し、女性や子供の観戦が容易になったということはたしか

に進歩だ。だが同時にチケットが高価になってしまった。著者は50ドルのチケット代は誰にとっても手が出ないほどではないと述べている。一試合の観戦ならば誰にとっても手が出る価格だろう。しかし昔ながらの労働者階級のサッカーファンが、毎週末スタジアムに通い詰めることが難しくなっているということは無視できない事実である。

3 サッカーと多国籍経済の接近

本書の中でも述べられているが、サッカーは今や投資の対象である。多くのクラブがスポーツ株式会社制度を取り、国内外を問わず資本を集めている。もっともその特徴が顕著なのがイングランドのプレミアリーグで、ユダヤ系ロシア人富豪のロマン・アブラモビッチがチェルシーを買収したのは記憶に新しい。さらに最近ではマンチェスター・シティというクラブがタイのタクシン元首相によって買収され、その後 UAE の投資グループである ADUG に買収されている。そのチェルシーやマンチェスター・シティも含めて、1990年代からプレミアリーグの各チームは「儲かる」体制を築いてきた。放映権をテレビ局に売り、スタジアムを新しく快適な空間にした上でチケットの値段を上げ、逆にフーリガンのイメージを商品化したグッズを売った。そういった体制はオーナーの私腹を肥やすためというよりはむしろ、クラブをより強くするか、存続させるためにとられた体制であった。

リーグ戦やチャンピオンズリーグに勝つためには多くのトップクラスの選手が不可欠だが、ブラジルやヨーロッパやアフリカのトップクラスの選手を獲得するには多くの資金が必要である。優勝を狙えるクラブはできるだけ優秀な選手をかき集め、賞金を得てユニフォームを売り、チャンピオンズリーグでの放映権料を得、シーズンチケットを売り、そのお金でまた選手を買うというサイクルを繰り返す。そうではないクラブ、つまりヨーロッパのトップリーグで優勝が狙えないチームやマイナーなリーグのクラブは、将来性はあるがヨーロッパでの実績が未知数である若い選手をアフリカや南米から買い、育成してトップレベルのチームに売って利益を得るというサイクルを築いていることが本書のなかで示されている。ここから、資金のあるヨーロッパのクラブが選手や監督といった人材を南米やアフリカを中心としたヨーロッパ以外の地域から買ってくるという手法に変化はないという構図が浮かび上がる。たしかに、グローバル化によってスカウト網は全世界的に広がり、注目されてこなかったアジアやオセアニアの選手がヨーロッパに移籍する機会は増えた。ヨーロッパのクラブに在籍する外国人の総数自体も増加している。しかし、買うのはヨーロッパの国のクラブであり、買われるのはヨーロッパ以外の国の選手である

という構図は変わっていない。

資金面で圧倒的にヨーロッパが先んじている現在では、その帝国主義的ともいえる構図は補強され逆転が不可能な地点にまで達しているといえる。ヨーロッパのクラブチーム王者と南米のクラブチーム王者が対戦するトヨタカップにおいて、ブラジルの中心選手であったジーコは1981年に南米代表のフラメンゴの選手としてヨーロッパ代表のリバプールと対戦し勝利を収めているが、現在のサッカー界ではブラジルの中心選手がヨーロッパのトップリーグに所属していないというケースはほぼ考えられない。さらに、本書では触れられていないが、南米やアフリカからヨーロッパのクラブに移籍してくる選手は大人の選手ばかりではない。ヨーロッパのクラブの下部組織には、十代前半のころから親元を離れて、あるいは親ともどもヨーロッパに移住してきた選手がたくさんいる。ヨーロッパのクラブのオーナーや資本は世界中から集まるようになり、試合は全世界的に放送されているにもかかわらず、実際のプレーに関わる人的資源を他の地域から買うという手法は変わることがなく、よい選手を買うことで勝つことを目指せるクラブは常にヨーロッパの一握りのクラブしかないといういびつさを、サッカーにおけるグローバリゼーションは内包しているのである。

4 グローバリゼーションと伝統

二章においてセルティックとレンジャーズのファンは、グローバリゼーションによって希薄になった宗教的あるいは文化的アイデンティティを再確認するためにサッカークラブを意識的に利用していると指摘されている。このようにグローバリゼーションが伝統の補強として作用する場合もあるが、多くの場合グローバリゼーションはローカルな伝統に変化を迫ると著者は述べている。その変化は四章では、チェルシーの昔からのファンにとっては愛すべき労働者階級的な雰囲気を持った伝統を破壊するものとして、また九章で述べられるイランの女性たちにとっては自分たちをイスラム文明から解放してくれる近代化の象徴としてとらえられている。十章でのアメリカはその二つの感情を併せ持つ国として描かれている。中産階級の家家庭にとってサッカーは子供の情緒教育に役立つ新しいスポーツとして期待されていた。

アメリカンフットボールのように暴力的ではなく、野球のように過度のストレスを受けることがなく、バスケットボールのようにスラム街のイメージを持っていることもなかったからである。サッカーは子供の自尊心を促進し、過度の競争を防ぎ、人生の試練についてのよい教科書になってくれる習い事としてポジティブに受け止められていた。しかし同

時に、サッカーにおいてはメキシコに次ぐナンバー・ツーの地域大国に過ぎないアメリカは、経済や軍事においては世界唯一の超大国であることのプライドから、南米やヨーロッパといった他の地域大国が作るサッカーの世界システムへ組み込まれることへのアレルギーも併せ持っていた。

さらにアメリカの場合、その歴史の短さから先祖から伝統的に伝わってくる文化が少ない。その少ない伝統のひとつである野球も、世界を対象にしたマーケティングを怠ってきたためにサッカーにとって変わられつつある。このサッカーによる浸食は、アメリカもグローバリゼーションの作用の対象であることの証明であると著者は指摘する。マクドナルドやナイキといった多国籍企業はアメリカから生まれたものが多いため、アメリカはしばしばグローバリゼーション批判において、金と覇権のために他文化を破壊するとして悪者の立場に立たされる。

しかし実際のところは、多国籍企業はアメリカの文化を代表しているわけではないと著者は述べている。ナイキやバドワイザーがサッカーのキャンペーンを張ったように、アメリカ発の多国籍企業がアメリカの文化を変化させることもあるし、サッカーに代表されるようなアメリカ発ではないグローバルな文化が、アメリカ発の多国籍企業がアメリカ以外の国を浸食するのと同じ文法でアメリカ文化を浸食してきたと著者は指摘する。ここで指摘しておきたいのは次のことである。十章まではグローバリゼーションが文化を破壊するという面よりも文化に改善をもたらしているという面を重視して著者は論じてきた。しかし、十章に限ってはグローバリゼーションは戦いの対象であると述べており、サッカーがアメリカの文化にもたらした改善点を述べていないのである。この点はいかにも自己弁護的であり、公平性を欠いていると言わざるを得ない。

おわりに

以上のように、本書はサッカーとそれを取りまく環境との関係をグローバリゼーションという観点からみるものであったが、グローバリゼーションが既存の文化や対立構造についてどのように作用してきたかを描写するにとどまり、これから先にどのように作用していくかという可能性を明確に示すものではない。またサッカーと多国籍経済との接近は、優秀な外国人選手の輸入によるチーム強化による自国選手のスカッドからの排除、その結果として経験が不足した自国選手で構成されるナショナルチームが弱体化する可能性についての言及もなされるべきではなかったか。また、少々エピソードが多すぎるくらいがあり、各エピソード間のつながりも明示されないため、理論的な展開が進まず明確な主張が

なされないまま終わってしまう章が多かった。

何よりも本書の最大の問題点は著者のグローバリゼーションに対する過度とも言える楽観主義的な姿勢である。著者は序章の中でグローバリゼーションはサッカーを改善すると言い切っている。また四章ではグローバリゼーションによって変化を迫られたり、衰退していくような文化は確かにあると認めつつも、そのようなかつての文化に含まれていた問題点を考慮に入れず、美点のみを懐かしむのは、存在しなかったものへのノスタルジーに過ぎないと批判する。たしかにグローバリゼーションはスタジアムからフリーガンを駆逐し、サッカーを女性や子供も楽しめるエンターテインメントにし、より普遍的なものにし、より豊かなものにした。

しかしサッカーというスポーツとそれを取りまく文化は、もともときわめてローカルな次元に根付いていたものである。祖父の代から地元チームのファンである家系に生まれ、洗礼を受けるよりも先にファンクラブに加入するようなファンもいれば、グローバリゼーションの恩恵を受けて、衛星放送される試合を通じてヨーロッパのクラブを応援するようになったヨーロッパ以外の地域に住むファンもいる。そのふたつのファン・コミュニティは質的に異なるものだ。前者が土着的で、近代システムのなかに埋め込まれた存在であるのに対して、後者は同一のサッカーチームを応援するというコミュニケーションを根拠とした動的なコミュニティであると言える。

バウマンが「クローク型共同体」と呼んだ後者のようなコミュニティは、サッカーの試合という意図的に設置された非日常の出来事を一時的に消費することが紐帯の根拠となる (Bauman 2000)。そういった新しいタイプのファンに対する従来のタイプのファン、つまり土着的なファンの反応は必ずしも協力的なものばかりではない。アメリカ人であり、衛星放送によって試合観戦のチャンスを得た典型的「クローク型共同体」の一員であった著者は、土着的なファンへのインタビューの際に、質の異なるファン間の摩擦に触れる機会があったにもかかわらず本書では触れられていない。また、グローバリゼーションによる摩擦が起きるのはファンの間だけではない。イングランドの代表的なクラブであるマンチェスター・ユナイテッドがアメリカ人オーナーのグレイザーに買収された際には、「サッカーのわからないアメリカ人に買収されるなんて」と、ファンが強い反発感を示した。同じくイングランドのクラブであるリバプールに至っては、地元リバプール大学の教授を中心とした一派がファンの募金でアメリカ人オーナーのヒックスとジレットからクラブを買い戻そうという動きが起きている。そういったグローバリゼーションによって新たに引き起こされた摩擦や地域密着型のクラブへの回帰という動きを考慮せずに、グローバリゼーションへの反発はノスタルジックな理想論であると否定した著者の主張には違和感を覚え

た。

しかしそういった批判点があるからといって、幅広い人脈を活用した、密度が濃く生々しいインタビューはその価値を失うわけではない。本書が、アメリカ的な要素が希薄という点で特殊だが、全世界に共有されているという点で普遍的なサッカーという多国籍文化を媒介にし、グローバルなものとローカルなものをつながり方を説明しようとした試みとして評価できるということに変わりはないのではないだろうか。

参考文献

- Bauman, Zygmunt, 2000, *Liquid modernity*, Cambridge: Polity. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ——液状化する社会』大月書店.)
- Bodin, Dominique, 2003, *Le Hooliganisme*, Paris: Presses Universitaires de France. (=2005, 相田淑子訳『フーリガンの社会学』白水社.)
- Cresswell, Peterjon and Evans, Simon, 1999, *The Rough Guide to European Football*, London: Penguin Books.
- Dunning, Eric, 1999, *Sport Matters: Sociological Studies of Sport, Violence, and Civilization*, Florence: Routledge. (= 2004, 大平章訳『問題としてのスポーツ——サッカー、暴力、文明化』法政大学出版局.)
- Kuper, Simon, 1994, *Football Against the Enemy*, London: Orion Publishing Co.
- 佐伯聰夫・仲沢真・間宮聰夫・矢島万沙未・佐藤健生, 2000, 『スポーツイベントの展開と地域社会形成——ウインブルドン・テニスからブンデスリーガ・サッカーまで』不昧堂出版.
- Huntington, Samuel P., 1996, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York: Touchstone. (=1998, 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社.)
- 高橋義雄, 1994, 『サッカーの社会学』日本放送出版協会.

(いわや ゆうすけ・修士課程)